

# ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

## 第14回                   メルキゼデクと同じような大祭司イエス ②

### ご自身を引き裂いて贖いになられた

#### 第7章16節から28節                   メルキゼデクの祭司職

⑩この祭司は、肉の掟の律法によらず、朽ちることのない命の力によって立てられたのです。

⑪なぜなら、「あなたこそ永遠に、メルキゼデクと同じような祭司である」と証しされているからです。

⑫その結果、一方では、以前の掟が、その弱く無益なために廃止されました。

⑬——律法が何一つ完全なものにしなかったからです——

しかし、他方では、もっと優れた希望がもたらされました。

私たちは、この希望によって神に近づくのです。

⑭また、これは誓いによらないで行われたものではありません。

レビの系統の祭司たちは、誓いによらないで祭司になっているのですが、

⑮この方は、誓いによって祭司となられたのです。

神はこの方に対してこう言われました。

「主はこう誓われ、

その御心を変えられることはない。

『あなたこそ、永遠に祭司である。』」

⑯このようにして、イエスはいっそう優れた契約の保証となられたのです。

⑰また、レビの系統の祭司たちの場合には、

死というものがあるので、務めをいつまでも続けることができず、

多くの人たちが祭司に任命されました。

⑱しかし、イエスは永遠に生きていますので、

変わることはない祭司職を持っておられるのです。

⑲それでまた、この方は常に生きていて、人々のために執り成しておられるので、

御自分を通して神に近づく人たちを、完全に救うことができになります。

⑳このように聖であり、罪なく、汚れなく、罪人から離され、

もろもろの天よりも高くされている大祭司こそ、私たちにとって必要な方なのです。

㉑この方は、ほかの大祭司たちのように、まず自分の罪のため、

次に民のために毎日いけにえを献げる必要はありません。

というのは、このいけにえはただ一度、  
御自身を献げることによって、成し遂げられたからです。  
⑳律法は弱さを持った人間を大祭司に任命しますが、  
律法の後になされた誓いの御言葉は、  
永遠に完全な者とされておられる御子を大祭司としたのです。

先月は創世記から引証された言葉を中心に、メルキゼデク系の大祭司ということについて  
学んで来たわけですが、今月はこの後半の部分、今度は詩篇110篇から引証されている御  
言葉を中心に、この箇所について与えられている御言葉を味わってみたいと思います。

詩篇110篇の④節には次のように書かれています。

「主は誓い、思い返されることはない。『わたしの言葉に従って  
あなたはとこしえの祭司メルキゼデク(わたしの正しい王)。』」

ヘブライ人への手紙では七十人訳の聖書からとった言葉を引証したり、あるいはそれ  
以前の聖書の言葉を引証したり、非常に自由に言葉を選び取っているわけですが、この  
110篇も一応詩篇の原型をとどめながら、しかもこの手紙の著者が自分の思いを伝えるの  
に適切な形になるように、詩篇の言葉のある程度置き換えながら書いているのです。

(ほとんど説明されていない祭司制度)

この前も触れましたが、この第7章は、<祭司制度>がきちんと理解されていないとなか  
なかわかりにくい箇所なのです。

特に、プロテスタント教会では<祭司制度>をあまり大切に考えていない傾向がありま  
す。言い換えると、「御言葉による教会」という言い方に基づく場合には、預言者的な営  
みをする教会は重要視されますが、祭司的な営みをする教会はやや軽視される傾向にあり  
ます。その理由は、祭司というのは制度であって、教会を教会でなくしてしまうのだ、活  
き活きとした霊的な命を奪ってしまうのだという感覚で捉えているところが多々あり、こ  
の祭司についての説明がほとんど教会ではなされていないからです。66

アメリカの教会など特にそうですが、説教者のことを「プリースト」という言い方を  
します。この「プリースト」という言葉は、実は「祭司」という意味なのです。  
プロテスタントの教会にも祭司職というものが位置づけられるべきで、牧師が祭司として  
そこでは位置づけられているわけです。

ですが、多くのプロテスタント教会では、このプリーストを「ミニストリーをする人間＝  
牧会者」という意味に捉えて、「説教する人間」と言う時に主に使っています。  
ところが、本来はそうではないのです。説教はあくまでも預言者的要素なのです。  
ですから、説教だけをしている限りにおいてはプリーストではないのです。

(祭司とプリースト)

では「どのようにして牧師がプリーストになりうるのか」というと、「牧師は説教すると  
同時に教会の聖壇において聖餐式及び洗礼式を執り行う、 sacrament の権能をゆだねら

れた者として教会に受け入れられた時に、牧師は初めてプリーストになるのだ」という考え方があるのです。

私どもの属している日本基督教団ではそういう意味で「二重教職性」と称して、二段階制度をとっています。まず、資格試験、面接試験に合格して、補教師（伝道師）となり、主に説教等を行い、その経験を経て、更に課題の多い資格試験、面接試験に合格して正教師（牧師）となり説教及び sacrament を執行するという制度です。

ルターの「万人祭司」という言葉は、そうした意味では「万人預言者」なのです。神の言葉の証しをするのはすべての人々によってなされるので、その意味においてすべての人々は祭司なのだ。ルターは捉えているのですけれども、そこでやっている業は祭司の業ではなく、預言者の業なのです。ですから、本来は「万人預言者」なのです。

この気づきは大変面白いと思うのですが、どういうわけかそこで「万人祭司」という言葉が登場してしまったのです。そこでプロテスタントの教会ではそれをそのまま受け止めながら、「すべての人々が神の言葉を証しする責任がある、語っていくべきなのだ」と言っているわけですが、礼拝の中では、御言葉が神からの言葉として語られると同時に、神から委ねられた恩寵の証しを多くの人々に分け与える責任を委ねられた者として牧師が sacrament を執行しています。

（祭司の役割）

これは、神から与えられたいわゆる「祭司の役割を担う人間」と「預言者の役割を担う人間」との二種類の役割を担う人間が教会に仕えるということはあってしかるべきだという立場で「職能的な意味で神が教会に委ねた責任として、教会はその二種類の役割を牧師に委ねていかなければならない」ということを実行しているわけです。

私たち牧師は、正直に神の言葉を受け継ぐ者としてその役割を担って行くことになりますと、「祭司とは何をする人間なのか」ということにも本気になって迫っていかなければならなくなるわけです。

少なくともイスラエルの宗教において、祭司と呼ばれるものが担った役割は「一つは、民のために執り成す、民が神の前に立てるように道備えをする、つまり、神から罪のために遠く離されてしまっている状況から、神の前に立てる状態に民を導き戻す、近づける」そういう役割が祭司の第一の仕事でした。

しかも、ここで著者が、繰り返し繰り返し書いていますように、祭司は人間であるのだから、神の元から離れて罪を犯す存在である。だから、先ず自分が清められるために燔祭を献げ、自らが清められた状態において初めて民のために燔祭を献げるという行為がなされていた。だから、自らのために燔祭を献げられない祭司は、民のために燔祭を献げられない、執り成せない存在なのだ、ということをご自分で言っているわけです。

言い換えると、「祭司すら完全な存在ではなく、不完全な存在であることを律法は認めているという、面白い理論です。だから自分のために燔祭を献げなさいと聖書は教えるのです。

第⑩節から⑳節、

「この祭司は、肉の掟の律法によらず、朽ちることのない命の力によって立てられたのです。なぜなら、「あなたこそ永遠に、メルキゼデクと同じような祭司である」と証しされているからです。その結果、一方では、以前の掟が、その弱く無益なために廃止されました。——律法が何一つ完全なものにできなかったからです——しかし、他方では、もっと優れた希望がもたらされました。私たちは、この希望によって神に近づくのです。また、これは誓いによらないで行われたものではありません。レビの系統の祭司たちは、誓いによらないで祭司になっているのですが、」

(レビ系統の祭司たちとメルキゼデク系の祭司の違い)

つまり、レビ系統の祭司たちとメルキゼデク系の祭司というのは全く違います。どこがどう違うのかと言うと、先ずそれは「世襲制ではない」。神が誓いによって直接、この大祭司は立てられ、神の選び、神の承認、神の命令があって初めて存在するようになった。罪汚れのない真の大祭司であって、歴史の中でただ一度だけ神から選び取られた御方である。そのことを歴史の上で神は明確になさろうとしたために、レビ族でない種族の中からその予型としての大祭司メルキゼデクを立てられたのです。全く誰もが予想しない方法で大祭司を神はお命じになる、ご任命なさるのだと予め告げられていたのです。

(日常を超えた聖別)

神の御前に誓いによって選ばれたことは、別な言い方をすれば、自動的な、あるいは伝統的な、歴史的な、日常的な事柄としてではなく、神そのものとの特別な関係において、この大祭司は任命されたのであって、日常茶飯な出来事からは聖別されたものとしてこの大祭司は選ばれたのだと言っています。<sup>70</sup>

聖書の御言葉は100%私たちの日常の中において意味を持ち、価値を持つ御言葉です。預言者は、その日常における言葉を用いながら、「日常のありように対する神の語りかけを語り続けてゆく存在」なのです。

ところが、神は、「その日常性を中断させ、断ち切る形で歴史の中に介入なさる」御方なのです。

この両者のギャップは、やはり旧約聖書という書物をずっと読んで来ると、そのことが非常にはっきりして来るわけですが、例えば、後の時代になって神殿礼拝が非常に形式的になってきた時に、神はその形骸化したものを断ち切る形で「主の預言者」をお立てになるわけです。

彼らは「主の預言者」と呼ばれて日常性の中にではなく、歴史を断ち切った形で歴史に対して物を言う。「お前たちが、今なしている罪禍は止めてしまえ」とか、「無意味な事柄だから一切を無にしろ」とかというようなことを語っています。

それはまさに、イエスが最後の聖週の中で行われた「宮清め」の御業に結びついて来るわけです。

その「宮清め」とは、神を礼拝するためだと称して、多くの人々が日常性の問題をそこに持ち込んで、そこで両替をしたり、鳩を売ったり、自分たちが苦勞して燔祭を連れて来なくても済むようにしたりと神に向かって盛大な祭儀が行われるように用意周到に利便的に準備をしたことに対し、イエスは、「神との出会いは、日常性を超えたものなのだ、日常性はそこでは断ち切られるべきなのだ」ということを明確になさろうとして「宮清め」をなさったのです。

(日常性を断ち切ることの重要性)

そこには、「神の宮を商いの場所にしてはならない」とか、「強盗の巣にしてはならない」という大変厳しい御言葉が出て来るのですが、もうちょっと別な言い方をすれば、聖なる神と出会うこと、神が出会ってくださることは、決して日常性の中には起こり得ない事柄なのです。それなのに、彼らは、神の御心を想定外に置き、神抜きで構築してしまった「自分たちの日常性」を、神の宮という礼拝の場にもち込んだゆえに、イエスは義憤に駆られて、それを打ち壊したということです。

それで、このヘブライ人への手紙の著者は「<この世>」と呼ばれる「私たちの歴史とか日常性は神の恵みによって保証され、支えられてはいるけれども、神からは遠く離れたものとして捉えている」のです。罪の所産としての歴史、罪の所産としての文化、罪の所産としての宗教活動、というように、私たちのなしている行為のすべてが、私たちの側から出て来る思考が先行して、神の御思いに心を向けることから遠く引き離されてしまっています。

だから、神は「特別に神が出会ってくださるための『日常性を断ち切る儀式』をお定めになった」、それが「燔祭」なのだと言うのです。自分自身を引き裂くということを言い表すために、あるいは、人々の目の前に見せるために、家畜や鳥を二つに引き裂いて神の御前に献げることをする。そういう日常性を超えた、自分たちの今のありよう、即ち、神抜きの日常を生きていることを完全に否定してしまうような生き方が生まれて来ない限り本物は表出してこないのです。

「勿論、悩みも、苦しみも、日常の様々な問題も、神の側に持ち込んで一向に差し支えないけれども、『そうした問題の延長上に礼拝があるのではなく』それを携えながら来るけれども『そこで日常性が断ち切れ』そのすべてのものは神の御前に、神の光のよって明るみに出され、丁寧に取り扱われ、解決されて行かねばならないわけです」。そこでは、人の知恵も文化も努力も何の意味もなさないことを100%承知した上で、神の前に膝を屈めなければならないのです。

「日本人の宗教観」には、やはり自分の行為を是認したいという思いが強くあります。熱心に願ったから、一所懸命祈ったから、神は聞いてくださったということをよく聞きます。（「念ずれば花ひらく」と軽く考えられやすい風潮がある）

例えば、教会学校の先生方の会で、「ヤイロの娘の癒しの問題」を話し合ったことがありました。ところが、死んでいる娘が生き返ったのは、イエスさまが熱心にお祈りなされたからだと教えているそうなのです。熱心に神に祈れば、私たちの願いを皆聞いてくださいますと。その先生は決して悪気があって言ったわけではない。むしろすごく信仰的に捉えて話したつもりなのですけれども、私に言わせれば、「それじゃ、イエスさまはいらなくなるね」。私が熱心になれば神を動かせる、私が熱心になれば歴史を変えられる、私が熱心になれば死んだ者を生き返らせられるとすると、「イエスの十字架は、そこでは何の役も果たさない」のですから。

「そのような反宗教性を完全に打ち砕くためにこそ、イエスはこの世にいらっしやった。そういう奢り高ぶりを打ち砕くために『祭司』を置かれ執り成しをされたわけです」。ところが、いつの間にか祭司の要らない宗教になってしまった。キリスト教は、そういう間違いを冒してしまう危険性を、やはりいつも抱えていると思わざるを得ないのです。

「だから祭司制度は私たちの日常性の延長にはないのです。だから教会も、日常性の延長だけにあるわけではないのです」日常性をどこかで断ち切る役割を、教会は担わなければならない。私たちの国の文化の中では、日曜日に教会に集まって礼拝をすることは、正に日常性を断ち切る、即ち聖別すること以外の何ものでもないのです。

ところが、そこに大変理解のある牧師が現れますと、あなたの日常の視点から考えてあげましょうと、「日曜日ごとに教会に来るのは大変でしょう。色々なこともあるでしょうから、まあ、月に一度は出ていらっしやい。聖餐式のある時は教会にいらっしやいな」などのたまうのです。そうすると「教会も日常性の連続になる」のです。すると祭司は要らなくなるのです。

(祭司は自らを引き裂かねばならぬ)

だから、人道主義に傾く牧師はなかなか祭司になれないのです。祭司になることは大変なことです。というのは、自らを引き裂かない限り執り成せないのです。自分が自分であり続け、牧師としての権威を持ち続けようとしたならば、祭司の務めは果たせない。自らが悔い改めて本当に神の御前に義として受け入れられない限り執り成せないのですから、神の御前に受け入れられたという承認を自分が自分に与えなければならない。

(説教はこの姿勢から生み出されてくると感じます。)

一週間祈ったって40日祈ったって、聖別されていない日常性の中でなしている行為の中では私たちの清めは起こり得ないのです。一方的に神が私たちに触れてくださる以外、清められることはない、だから、私たちは未だ不完全なのだ、とこの手紙の著者は言うのです。

そうして、その不完全な人間が神の御前に祭司として立てられた。それは「神の歴史を担う民としてイスラエルを選んだから」神はそのような道を与えてくださったのですが、そ

れでは結局、執り成しができませんでした。人々を神に近づけるどころか、神から遠ざけてしまう結果を招いてしまった。更には異なる神への接近をも許してしまっているのです。

だから、今や滅びの状況に置かれている民を救うためには、もう世襲の中から生まれ、継続性の中に立っている祭司によっては、執り成しが不可能な状態まで罪が進行してしまっているのだから、神は誓いによって、誓約によって一人の人をお立てになりました。

それは完全なる存在、罪なき御方でありました。この手紙ではそのイエス・キリストの御降誕の真実が、「インカルナティオ=受肉」であるということあまり正面切っては語っていないのです。その理由は何なのかと言うと、この御方は、神の誓いによってこの世に来られたのであって、あなたがたとは別枠で臨在しておられる御方なのだ、著者は「受肉を神の秘儀として」ここでも語っているわけです。

誓いによって生まれた御方、神の御言葉、御約束によって与えられた存在なのだ、だから、その神の御約束が機能しないところでは、この御方の存在は意味を成さない。これはまさしく信仰の問題であって、それ以外の問題ではない。

この手紙を書いた時代にも、イエスの人間性、神性に関する問題は色々ありました。そしてそれに関する学説が色々立てられたのですが、著者は「イエス・キリストという御方は、どんな学説によっても証明されない御方なのだ、あなたがたの知恵や何かによって解明しようとしても不可能な存在なのだ、それは神が御言葉によってお立てになった御方なのだから、誰にもその真理はわからない、神だけがご存知の御方なのだ」という言い方をしているわけです。

(牧師の祭司性)

「その『神によって立てられた権威』を本気になって、私たちの教会が継承しようとしているのか、担っているのか」となると、色々な面であやふやなものがあります。例えば教会の牧師、それは「神によって立てられ任職された存在である」、確かにどの教団教派もそう言っていますが、それでは神によって立てられ、任職された存在であることが、具体的にあなたがたの日常性の中ではどう機能し、受け止められているのかということが問題になります。

例えば「牧師だって人間だよ」などということが通れば、神が御言葉によってお立てになったという「神の権威」はどこへいってしまうのでしょうか。神の権威が何もなかったら、神によって立てられ、任命されたなどという言葉は何の意味も持たなくなるわけです。そういうところまで、実は手紙の著者は「祭司の問題を取り扱って行く際の問題にしている」わけです。

だから、彼等がこの手紙を受け取った時の状況がどうであったか、ということとはともかくとして、「私たちの時代に、これが聖典として今、語られているとすれば、その部分がもっと真剣に問われなければいけない」と私は思います。

私は、牧師として神に立てられた、神によって選ばれたとと思っているのですが、そう思っているだけでは駄目なのです。神がお立てになった神の権威をきちんとどこかで承認して、その権威に自分自身が「屈伏しなければいけない」わけです。「この世において神の権威によっ立てられた祭司は、祭司として立てられている限りにおいて、自らを引き裂いて民を神の前に近づかしむる責任がある」そういう覚悟がなかったら、神によって立てられたなどと言ってはいけないのです。

ところが現実には、なかなかそうはいかないのです。幾ら伝道したって世の人々は聴いてくれないし、第一、この世の中は平静は神なんか必要としないのだから。彼等の分かる日常の言葉で神を紹介さえすればいいのだというようになって、自分が自分を引き裂いてまで神の御前に立つということを願わなくなる。そういう傾向が、今日私たちの群れの教会には満ちてくるのではないかと懸念するのです。

御自分の命を差し出して携神の御前に民の身代わりとして立つという明確な覚悟をされたメルキゼデク系の大祭司という御方は、堅固な祭司意識によって立てられている、神との間にそういう関係をもつという契約によって生まれられた祭司ですから、そのイエス・キリストはこの世の人々が何を言おうと、皆が何を考えようとそんなこととは全く関係なしに、神のお考えを誠実に遂行した御方なのです。そしてイエスは神の優れた契約の保証とおなりになったと⑳節ではこう書いています。

#### 第㉑節、㉒節、

「この方は、誓いによって祭司となられたのです。神はこの方に対してこう言われました。「主はこう誓われ、その御心を変えられることはない。『あなたこそ、永遠に祭司である』このようにして、イエスはいつそう優れた契約の保証となられたのです」

「誓い」という言葉がこの㉒節では「契約」という言葉に置き換えられています。つまり神が私たちに向かって誓われた御言葉は神の契約なのだ。神の契約と言った時には自分たちの立場が重くなります。それにかかわる限り自分も契約に責任を持ち、その契約の締結者として役割を担わなければならなくなります。ですから、そういう意味では、神の御前にメルキゼデク系の大祭司イエスが契約の保証としてお立ちになった以上、私たちにもその契約が神によって生ぜしめられたということなのです。この契約を徹底的に保証できる御方としてイエスはお立ちになった。（神の誓いの徹底的な保証とは重い言葉です。神の栄光とも言えるのではないのでしょうか。作者の思い。「私が誠実でなくてもキリストは常に真実であられる。キリストは御自分を否むことができないからである」テモテへの手紙二二章㉓）

#### 第㉓節前半

「また、レビの系統の祭司たちの場合には、死というものがあるので」

このメルキゼデク系の大祭司というのは、レビが入れ代わり立ち代わり死んではまた、その子が後を継ぐという形で祭司職を踏襲して来たけれども、「この御方はそのようにはなさらない。独りで完全に徹底的に祭司の職を担われる御方です。



交代もなければ、その点で個性の相違もなければ、首尾一貫してこの御方は大祭司としての責任を担い続けられるのです。で、ちょっと目を7章の短い場所に注いでいただきたいのですが、

第⑳節の後半、

「務めをいつまでも続けることができず、多くの人たちが祭司に任命されました」

第㉑節、「しかし、イエスは永遠に生きているので、変わる事のない祭司職を持っておられるのです」

祭司の仕事をこの御方は成し続けられる御方なのです、ということが書いてあります。そしてその次も同じような表現ですけれども、

第㉒節、

「それでまた、この方は常に生きていて、人々のために執り成しておられるので、ご自分を通して神に近づく人たちを、完全に救うことがおできになります」

これらは書かれている言葉のテンションから言うと「この御方は祭司の務めを果たし続けられるので、彼が生き続けておられる限り、すべての人々を救い続けられるのです」と読めます。

ですから、私たちの救いは私たちに起因しているのではなく、救い続けていてくださるこの御方の恵みに依存しているのであって、賜物としての救いがそこには既に約束されているのです。しかし私たちは<日常性の継続>の中ではその救いにあずかれない。なぜなら罪を悔い改めて、その御方が献げてくださる犠牲を自らの犠牲として承認しない限り、というところに<十字架の意味>が立って来るのです。<sup>80</sup>。

イエス・キリストの贖いの十字架を「私のための十字架」として受け止めない限り、この契約は残念ながらあなたのものではないのです。しかしもし、あなたが「私の贖い主」として十字架のイエス・キリストを受け入れるならば、その御方は復活なさって生き続けていらっしゃる御方ゆえに贖いは永遠に有効なのです。私たちの中にその御方は生き続けてくださるがゆえに私たちは救われ続けるのです。（松山幸生先生は悔い改めをいつも重く語らておられた。）

（神の招きに応答する礼拝・牧師は祭司）

そのようなイエス・キリストに対し、ここでは形式的な行為としての礼拝など意味を持ちません。私たちの為す業としての礼拝は意味を持たないのです。神の招きに応答することにおいて持たれる礼拝のみが意味を持つのです。「神の恵みが今ここにあることが、分与される『聖餐』においてのみ確認されていきます。ですから、その事柄を人々に神の恵みとして分け与える役割を任じられているのが『祭司』なのです。ゆえに「牧師は祭司でなければならない」というのが著者の主張なのです。

祭司であることは先程言いましたように、自分が罪なき存在でなければならないということですから、大変なことです、これは…。

これを本気になって読むなら、それは「あなたは自分の救いのためにではなく、あなたの周りにあずけた人々のために毎日あなた自身の心を裂けるか」という神からの厳しい問いかけが迫ってくるのです。

その心構がないならば、「あなたがどんなに立派な説教をしても何にも意味を成さない。日常性の継続の中には、神との出会いはないのだ」という厳しさがこの中に示されているのと思います。

②節の「誓いによって」という言葉は非常に厳しい言葉だと思います。神との究極的な出会いと確認、約束によってしか、この事柄は成り立っていない。「死」という自分自身を引き裂いて、相手のために命を与えるという方法でしか、祭司は人々を神の前に近づかしむることはできないのだ。それは誰しもができなかったことなのだ。

「だから、イエス御独りだけがカルバリの丘でそのことを完成してくださった。その御方にすべてを委ね、命を預けて生きる以外に救われる道はない。しかしもし、その御方の業を受け入れ、その御方に命を預けて一生を歩もうとするならば、どんなに重い罪を犯していようと、イエスはあなたを、私を赦し続け、救い続け、贖い続けていてくださるのだ。」

著者はこういう論理を展開します。そしてここからはメルキゼデク系の大祭司について別な角度から説明を始めます。

第⑩節、

「このように聖であり、罪なく、汚れなく、罪人から離され、もろもろの天よりも高くされている大祭司こそ、私たちにとって必要な方なのです」

私たちはちょっと傷を癒してくれたり、ちょっと慰めたりしてくれる「ちょっと」を必要としているのではなく、根本的に造り変えてしまう程の力をもっている御方にすべてを委ねることが必要なのです。

エレミヤとかイザヤとかいう預言者たちがイスラエルの中で「あなたがたは平安もないのに平安平安と言っている」とか、ちょこっと傷だけ癒してもらって「癒された」と言っているけれども、それでいいのか、ということを訴えています。正にその訴えがここに出ているのです。この御方によらなければ本当の癒しも、赦しも、平安も、救いもないとはっきり告げるのです。だから、イエス・キリストがどうしてもいてくださらなければ困る。この御方が必要なのだと言っているのです。

私たちの日常性の中では、飢え渴くほどにイエスを連続的に必要とする事態はあまりありません。そういうさめた心で守られている礼拝とか神の言葉への傾聴とかは著者の立場からすれば、全く意味を持たない。「もどきに過ぎない」。とするといくら「礼拝もどき」をしても救いにはならない。

しかし厳密に私たちの礼拝というものをよく考えてみますと、真の礼拝からは遙かに遠い「礼拝もどき」に過ぎないのではないかなと感じることが多いですね。なぜなら、そこで自分が本当に引き裂かれていないのです、いつでも自分は自分として温存しておきたい、そしてその温存した自分がそっくりそのまま、神に受け入れられたいと不遜にも考えているわけです。（猛省です。ピタリと言い当てられています。）

ルターが「万人祭司」といった時には、おそらく「すべての者が引き裂かれることを神の御前に覚悟して立つ」という前提だったと思うのですが、どうも皆そうは思わないで、「温存したままの自分がそっくりそのまま祭司様になってしまうこと」が、「万人祭司」だと思っている気がするのです。（万人祭司はあり得ないと思います。写者。）

ですが、祭司になることはすごく大変なことなのです。

預言者の方はテコアの牧者であった人が預言者になったとか、元々神殿預言者であったイザヤが神から特別聖別されて預言者として立てられたとか書いてあるわけですから、預言者は特段の資格なしになれたわけです。

ところが祭司と名のつく者は選ばれた者しかなれなかった。その選ばれた者として神の御前に立たされているのだという礼拝の時には、預言者としてということ以上に祭司として己を引き裂いて執り成す者として神から立てられているのだ、ということ牧師各人が認識しないと、本当の意味で祭司とは成り得ず、かつ預言者としても「主からの預言者」とはなり得ないでしょう。

イザヤとかエレミヤなどもそうですね、あるいはエリヤもそうでしょう。「多くの預言者が預言者であると同時に祭司にもなったのです」。彼らがそこで命を狙われ、自分の命を差し出す覚悟で神の言葉を語り続けた。もっと別な言い方をすれば「神の言葉を語り続けるために、彼らは命を差し出さざるを得なかった。それが実は神の前に、執り成し手としての祭司でありかつ人々の命を救う者として神の御言葉を告げるという預言者でもある『牧師の原型』なのではないか」と私は思います。

預言者として仕えるということは、「遠くから神の御声を聴いたのだ」と自分が傷まない、自分を引き裂かないで、ただ皆に向かって言葉を語ればいい、ということではないだろう。そんなことを思うのです。預言者にとって必要不可欠な存在は神に選ばれて罪なく、汚れなく、罪びとから離されて、すべてのものから高くされている御方、イエス。復活の主、昇天の主、今、支配していらっしゃる御方、その御方が何よりも大切な存在なのです。

第⑭節、

「この方は、ほかの大祭司たちのように、先ず自分の罪のため、次に民の罪のために毎日いけにえを献げる必要はありません。というのは、このいけにえはただ一度、ご自身を献げることによって、成し遂げられたからです」

ここでは「イエスの十字架の意味をこのように捉えているのです」

第⑳節、

「律法では弱さを持った人間を大祭司に任命したが、律法の後になされた誓いの御言葉は、永遠に完全な者とされておられる御子を大祭司としたのです」

「旧約聖書の神の恵みや約束が完成されるのは、このイエスにおいてです」と書かれています。ではなぜそう言わなければならなかったかということ、例えば、当時のローマの文化の中では、キリスト教はユダヤ教の一派だと考えられていて、ユダヤ教の人々からは、キリスト教はユダヤ教の異端分子だと思われていたからです。

ところが、この著者は、「そうではない、アブラハムを選ばれた神の恵みが完成するのは、このイエスによってでしかないのだ、他のどの方法を講じても駄目なのだ。だから皆、イエスの救いにあずかることによって始めて神の言葉は完成するのだ」ということを語っているのです。

「これは、当時のユダヤの人々にとっても、あるいは世界文化の中心だったローマの人々にとっても、すごいチャレンジだった」のです。

「あなたがたが認めようと認めまいと、（あなたがたが認めるなどと言うこと自体価値も意味を持たないが）ユダヤ人よ、あなたがたは自分たちは選民だなどと言っているけれども、本当に選ばれた者になるためには、このイエスである大祭司の執り成し以外に罪を消し去る御方はどこにもいない。なのに、その御方を拒んでいるならば永遠に神に近づくことはできない」

これはすごい言葉なのです。そして確信をもって語っているのです。

それは、とりもなおさず「それを受け入れない者たちから、危害を加えられることを覚悟しなければならない」ということです。そういう状況でこのことを語っています。

なぜそこまでかということ「自分が正しいことを言いたいから」ではない。

「本当の救いに一人でも多くの人があずかってほしいから」なのです。

問題は「その動機がどこにあるのか」ということだと私たちにこの手紙は問いかけて来るのです。

救い続け、贖い続け、赦し続け、生き続けていらっしゃる御方は、イエス以外にいないのです。だから、この御方に出会わない限り救われません。ということを100%誠意をもって真剣に語り続けていく、呼びかけてゆく、それが実はこの第7章なのです。

私たちにとって永遠の命を保障し、幸せに導き、明日を約束してくださる御方、完全な「救い主」なる御方はこのイエスなのだ。それ以外にはいないのだ。後にも先にもこの御方しかいないのだ。ということを著者は本気になってどうしても訴えざるを得なかった。

しかしながら「今日の教会が本気になってそのことを宣べ伝えているのかどうか」ということになる

とすごく問題があると思うのです。それはもっと別な言い方をすれば、信仰が日常性の中断ということをおもひ考へないで、日常性の延長の中に救いがあるというような錯覚に落ち込んでいる。あるいは、「日常性が神の恵みによってだんだん清められてゆくだ、丁度、沈殿槽に入れられた水にだんだん上澄が出来て来るのと同じように、そこにじっとしていればだんだんあなたがたも清いものになってゆくでしょう。だから信仰生活は長いことが大事なのです。」などと言ったりするわけです。長い方がいいのなら、これから生まれて来る子どもは可哀相です。神はそんなことは言われぬのです。

「信仰においては、そんな日常性なんか引きずらないで、この瞬間キリスト・イエスなる神と出会うことによって完全な救いに達することができるのです」、ということをおもひに信じ、おもひに語ってゆく。それが今日の宣教なのではないかなと思うのです。

「聖餐式」がいろいろな教会で守られています。

イエスの私たちへの贖罪の業、この手紙で言うなら「大祭司」としての業を受け入れる、承認する、そしてその御方の執り成しによって清められていることを確認する、それが「聖餐式」であるとするならば「私たちは本気になって聖餐式にあずかっているのだろうか」ということがとも共々に問われていると思うのです。

本当に教会が教会として立つことを真剣に考えたならば、「教会の sacrament の執行は自己を十分に吟味して守っていかなければならない牧師の大事な課題なのです」。そして、それに加わる一人ひとりも同じような思いと祈りをもって集まって来なければ真の sacrament は行えないのだということになるのです。

プロテスタントの教会では、カトリック等とは異なり、お葬式も結婚式でも聖餐式はなく、主の日の礼拝のみということになっているのですが、それもだんだん少なくなって月一回とか、年に何回とかという教会が増えて来ています。聖餐は本来、「御言葉を与えられた者たちがその御言葉への応答として『自らを引き裂き、神が引き裂いてくださった命にあずかる』ということなのです。そして、その日与えられた御言葉を、私はあなたの御言葉として受入れますという『信仰の告白』でもあるわけですから、本来ですと、『説教と聖餐』というものが一体になって、初めて『礼拝になる』のです」

そういう礼拝を毎週きちんと守れば一番いいのですけれども、私の教会でもなかなかそれが出来なくて月に二回しか守っていません。やはり神の御言葉に対する自らの応答としてせめて祈り深く、清められた者として日常性を断ち切って、時をそこに備えてゆくことを私たちが繰り返していき、更に主日ごとにそれができたなら、それは素晴らしいものになって行くだろうと思います。

まとめとして、今日の箇所は、メルキゼデク系の大祭司イエスということについて書かれていたわけですが、裏返して言えば「私たちがその御方がなしてくださった贖いの業に、今どうかかわっているのか」という問題を同時に受け止めながら、この御言葉を学んでゆくことに大きな意味があると思います。

そして、「その御方が生きていらっしゃる、贖い続けていらっしゃる、そして赦し続けてくださるというその強調ポイントをしっかりと捉えていくことが良いのではないか」と思います。

神は今も、キリスト・イエスにおいて私たちの中に働き続けていらっしゃる。その働きを継続されるためにイエスが十字架の上で亡くなられ、三日目に復活なされたというあたりをきちんと捉えておくべきでしょう。そういう意味では、イエスのご復活の朝を、畏れをもって迎えることが私たちには必要なのでしょう。

私たちがその肉体を引き裂かせた原因であったその御方が、今も生きて私たちと一緒に歩み続けていらっしゃる。私たちのなした罪を全てご存じの御方が私たちの中に立たれて、しかも私の罪をことごとく赦し続けていらっしゃるということが、イースターの朝共々に確認できれば、素晴らしいものになって行くだらうと思います。

(1997年3月8日)

写者あとがき

(1)ヘブライ人への手紙第7章からメルキゼデク系の大祭司とアロン系の大祭司の違いを選び出しました。

### メルキゼデク系の大祭司

1 このメルキゼデクはサレムの王であり、いと高き神の祭司でしたが、王たちを滅ぼして戻って来たアブラハムを出迎え、そして祝福しました。

2 アブラハムは、メルキゼデクにすべてのものの十分の一を分け与えました。メルキゼデクという名の意味は、まず「義の王」、次に「サレムの王」、つまり「平和の王」です。

3 彼には父もなく、母もなく、系図もなく、また、生涯の初めもなく、命の終わりもなく、神の子に似た者であって、永遠に祭司です。

16 この祭司は、肉の掟の律法によらず、朽ちることのない命の力によって立てられたのです。

17 なぜなら、「あなたこそ永遠に、メルキゼデクと同じような祭司である」と証しされているからです。

19 後半――、この希望によって神に近づくのです。

21 この方は、誓いによって祭司となられたのです。神はこの方に対してこう言われました。「主はこう誓われ、その御心を変えられることはない。『あなたこそ、永遠に祭司である。』」

22 このようにして、イエスはいっそう優れた契約の保証となられたのです。

24 (しかし、) イエスは永遠に生きていますので、変わるることのない祭司職を持っておられるのです。

25 それでまた、この方は常に生きていて、人々のために執り成しておられるので、御自分を通して神に近づく人たちを、完全に救うことができになります。

26 このように聖であり、罪なく、汚れなく、罪人から離され、もろもろの天よりも高くされている大祭司こそ、わたしたちにとって必要な方なのです。

27 この方は、ほかの大祭司たちのように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために毎日いけにえを献げる必要はありません。というのは、このいけにえはただ一度、御自身を献げることによって、成し遂げられたからです。

28 律法は弱さを持った人間を大祭司に任命しますが、律法の後になされた誓いの御言葉は、永遠に完全な者とされておられる御子を大祭司としたのです。

## レビ系（アロン系）の大祭司

11 ところで、もし、レビの系統の祭司制度によって、人が完全な状態に達することができたのであれば、——というのは、民はその祭司制度に基づいて律法を与えられているのですから——いったいどうして、アロンと同じような祭司ではなく、メルキゼデクと同じような別の祭司が立てられる必要があるでしょう。

18（その結果、一方では）、以前の掟が、その弱く無益なために廃止されました。——

19 律法が何一つ完全なものにできなかったからです。

20 また、これは誓いによらないで行われたのではありません。レビの系統の祭司たちは、誓いによらないで祭司になっているのですが、

23 また、レビの系統の祭司たちの場合には、死というものがあるので、務めをいつまでも続けることができず、多くの人たちが祭司に任命されました。

(2)第14回ではメルキゼデク（創世記第14章⑩、詩篇第110篇とこの手紙の三箇所）にのみ登場する）を理解するために、前提となる祭司制度について詳しく説明されています。この章の約半分を用いて旧約聖書と新約聖書の架け橋になる知識が沢山述べられています。他の解説書にない特色とされます。後半の多くの部分では「祭司としての牧師」について、ご自分自身にも向けて厳しい言葉で現状の覚醒を訴えられています。神の呼びかけに応答する礼拝と讃美、聖餐式の極意を私は猛省をもって噛み締めさせていただきました。

(3)繰り返しになりますが、この写書ということの大それた思いつきにも猛省をしております。ただ単に「写せばいい」という軽率な気持ちで始めましたが、私の知識では理解できない神学的事柄がありますが、それを共に推考しながら前進させてくださるお力が与えられたことは聖霊のお導きでありました。森容子先生が毎月渾身の力を込めて推敲して下さって完成に導かれております。今回は牧師先生にとっては信徒以上に厳しいご自身の「引き裂き」があられたと思い、その粘り強い忍耐と勇氣に感謝と尊敬の念を表さねばなりません。

正直に申し上げますと、私は森容子先生の推敲された原稿の訂正の打ち直しにまる二日間を要しております。そのように、松山先生の講述から時を経、かつ読者の拡がりを見込んで、元原稿に手を入れさせて頂くことは、私たちにとって、畏れをもって行うこと、生易しいことではありませんが、このことは、私たち自身の学びとしても大いなる信仰の糧を頂いております。感謝でございます。2022年9月30日